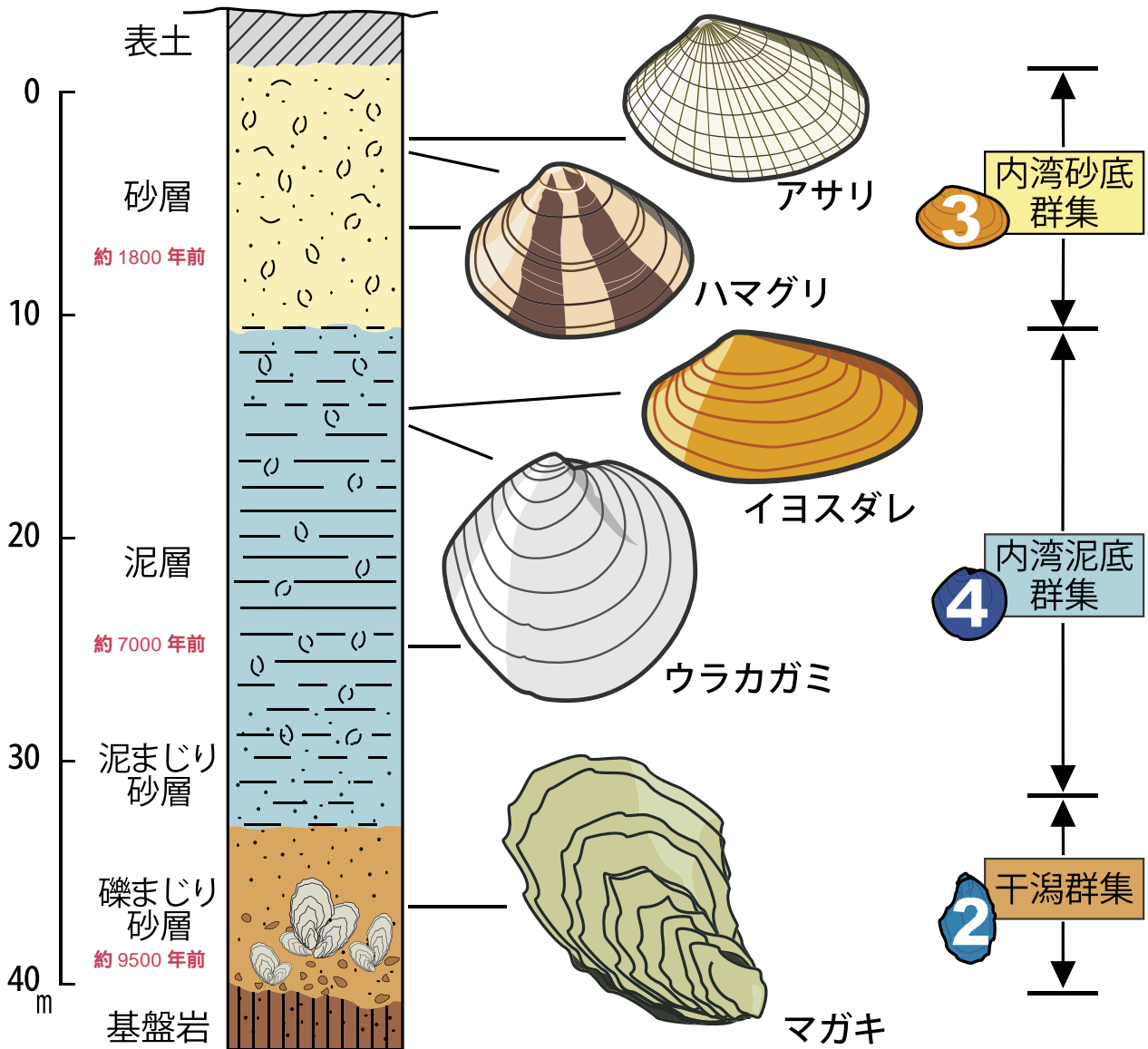


すいちょう
海面と貝類群集の垂直変化



図．おぼれ谷の内湾における模式的な貝類群集の垂直変化

垂直変化はどのような順序でできたのだろう

約1万年前以降の海面の位置を示す証拠が、低地をつくる地層（沖積層）に残されています。縄文海進時に各地に分布したおぼれ谷の地層には、マガキやハイガイ、イボウミニナなど湾奥の干潟にすむ貝、ウラカガ

ミやイヨスダレなどの内湾の水深の大きい泥底にすむ貝、ハマグリやアサリ、カガミガイなど砂浜にすむ貝が多く含まれています。過去にそこにすんでいたそれぞれの貝は生きていた時の海面を示しています。さらに貝殻の年代測定を行うことで、地層の積み重なり方の移りかわりの時間経過を知ることができるようになります。地層と貝類群集の移りかわりの順序を考えてみましょう。

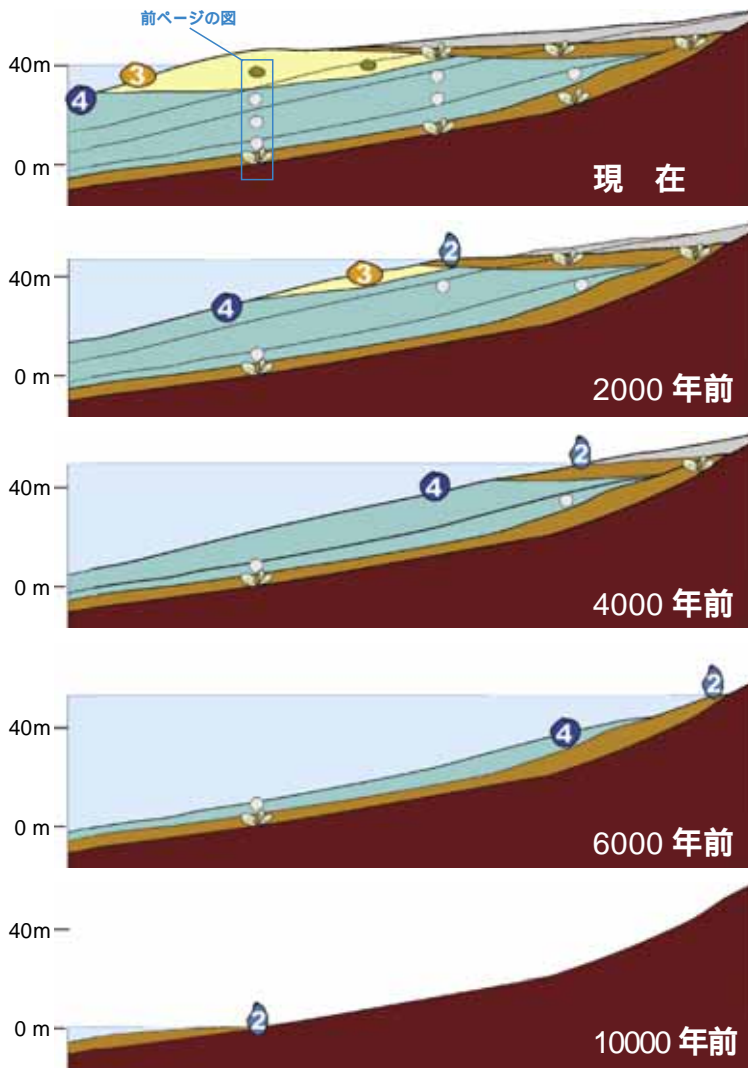


図. おぼれ谷型内湾の貝類群集の模式的な移りかわり
 貝マークの ^{ひがた} は干潟群集、 は内湾砂底群集、 は内湾泥底群集。貝類群集についてはワークテキスト 10・11 を参照。(松島、1984 から作成)

参考文献

松島義章, 1984. 日本列島における後氷期の浅海性貝類群集 - 特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷 -, 神奈川博研報 (自然科学).

約 1 万年前以降現在までの海面と貝類群集の移りかわり

海面が -120m であった 2 万年前以降、海面は上昇をはじめました。1 万前ころの海面は、現在よ

りも低い -40m 前後に位置します。海面の上昇とともにやってくるのはマガキなどの干潟群集です。

その後、急激な海面上昇があり、約 6500 年前にはついに現在の海面を越えました。そして、海進最盛期の約 6000 ~ 5500 年前では標高 4m 前後の高い位置に達しました。このとき湾奥には干潟群集が見られ、沖合にはウラカガミなどの内湾泥底群集が見られます。

そして約 5000 年前になると、一転して海面の低下がはじまるのです。このことによって、それまでずっと内陸に向かって前進してきた貝類群集は沖合側に移動していきます (たとえば、左図の干潟群集の移動を参照)。

そして約 4500 年前には 1.5m まで下がってしまいました。その後、約 3000 年前にかけては若干の上昇をするのですが、約 2000 年前には現在と同じか若干低い位置まで下がったようです。それ以降はわずかな上がり下がりくりかえして現在の海面の位置になったのです。海面の位置の時間経過的な変化とともに地層をつくる堆積物と堆積場所、それともなう貝類群集が移動していきました。

写真 (左)
 約 4600 年前の干潟群集カキ礁 (鶴見川河床)



写真 (右)
 ウラカガミを主とした約 5800 年前の内湾泥底群集 (川崎駅前地下)

